

The social welfare in OSAKA



大阪の 社会福祉

2023年7月

818



社会福祉
法人

大阪市社会福祉協議会

<https://www.osaka-sishakyo.jp>



いろいろな方法でつながる ～見守りの輪づくり～

2・3面

東成区 (3面)

中道地域ふれあい喫茶
活動再開を転機に！
「特技を活かしてみんなで楽しく」

東淀川区 (2面)
ちよつと気になる人に
声をかける勇気を
「東井高野声かけ模擬訓練」



HB

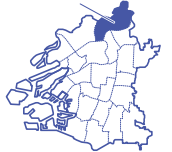
高速道路をドライブ
中、ナビも見なくて
いいので、テレビを
つけて走っていた。自局の番
組宣伝と再放送ばかりの
NHKテレビに文句を言いな
がら、2回目の「病院ラジ
オ」を見ていた。場所は長野
県立こども病院▼難病のこ
どもやその親に、病気のこ
とや治療の過程、将来の展
望などを聞いていくのだが、
多くの患者やその関係者は
長年の経験からか病気のこ
とを受け入れ、淡々と語っ
てくれる。

司会の漫才師も力まず、笑
顔で話を聞きます▼ところが
治療の方法もわからず、
将来が全く見通せない病状
のこどもが、それでも医師
が寄り添ってくれているこ
とに感謝し、信頼を寄せて
いる場面、後部座席に座っ
ていた医師が声を出して泣
き出した。自分はいい医
師なんだろうかと自問し
ているようだった▼病院
の外では雪をかぶった山
や緑の畑が広がって、私
たちに冷静であることを
求めているようだが、運
転中のドライバーからも
涙声が続いてきて心配に
なった。私たちが今、命
を預けているドライバー
が、涙で前が見えない状
態になっているのだ▼
いい番組は何度でも再
放送していいんじゃない
かと、NHKを許してしま
った。

(石)

ちよつと気になる人に声をかける勇気を 東井高野声かけ模擬訓練

東淀川区



身近な範囲で 模擬訓練

5月27日、東淀川区東井高野第10町会で「認知症声かけ模擬訓練」が開催されました。外出して目的地にたどり着けず道に迷われている方を見かけたときに、声かけのポイントに沿って安全な場所などに誘導する訓練です。

取組みに至ったのは、東井高



▲「こんにちは」目線を合わせながら声をかけます

の目を増やしたい。また住民同士が『あの方の」と気になるなあ』と、ちよつと気になる人のことを相談し合える雰囲気、地域の地域をつくることで、いくつになっても安心して住み続けることができる地域をめざしたい」という白坂会長の思いから、「気になる方」に気づくためのポイント学習会」「道に迷って困っている方への声かけの方法など」の2回の事前学習会をしたうえで模擬訓練をすることに決まりました。

まずは声をかける ところから

訓練当日は、地域会館に集まり、まず白坂会長が「失敗しても練習やから、いろんなことを体験してみよう」とあいさつした後、グループに分かれて会館を出発し、交番に見立てた目的の地まで誘導する訓練を実施しました。

日頃、見守り相談室がおこなっている認知症高齢者が行方不明になったとき協力者に情報配信するメール「みまもりメール」に見立てた、高齢者の情報シートを参考に、認知症高齢者役に扮した職員に声をかけるところから訓練スタートです。「こんにちは。私は△△といいます。お名前聞いてもいいですか」と目線を合わせながら声をかけます。「どこ行きはるんですか？」と声をかけると「スパーに行くとところなの」と言いながらも逆方向に向かっていこうとする方に、話しかけながら安全な場所に誘導します。「日陰で休憩しませんか」「私もスパーに行くとところだったので一緒に行



▲「いいな」と感じた声かけができた「GOODカード」をお渡し

これならできそう を考える

きましようか」「どこから来られたんですか」などと声をかけ、会話のなかで情報を引き出しながら一緒に交番に見立てた目的地まで連れていくことができました。高齢者役が「いいな」と感じた声かけには「GOODカード」を手渡すなど、笑いを交えながらおこなわれました。

その後のふりかえりでは「知らない人でも親近感を持つてもらえるように自分が先に名乗る」「雑談をしながら話を聞き、状況を把握することが大事だと思った」「知り合いなら声をかけやすい」や、「知らない人に声をかけてどこかに誘導することは難しい。おまわりさんを呼んだ



▲訓練の後、グループごとにふりかえり全体共有

あとで、話しながら一緒に待つことならできそう」といった意見が出ていました。

一連の取組みをサポートしてきた区社協・見守り相談室の矢野麻衣子さんは「なぜ声かけ模擬訓練が必要なのか、という部分を事前学習会で共有できたことにより、『当日はこのように声かけしよう』とたくさんの案をメモに書いてきてくださった方もいて、学習会を積み重ねることの重要性を実感し、自分の地域をよくしようという住民の皆様思いを肌で感じることができました。今後もこのような身近な範囲での取組みを広げていきたい」と思いを語りました。

活動再開を転機に！ 特技を活かしてみんなで楽しく 中道地域ふれあい喫茶

東成区



コロナ禍を経て 活動にプラスを

地域住民が中心となり実施している地域福祉活動は、コロナ禍で活動の制限を余儀なくされてきました。最近では、ようやく感染者数の減少や5類感染症に移行したことに伴い、再開する活動も増えてきました。

今回は、休止中の活動を再開するにあたってコロナ禍前のカタチに戻すだけでなく、+αの活動を始めた「ふれあい喫茶」を紹介します。



▲4月はいちご大福をつくってみんなでいただきました

話を聞いたのは、東成区中道地域福祉活動サポーターの松井洋子さん、東成区社協・生活支援コーディネーターの松原里さんです。

コロナ禍前、コロナ禍での中道地域ふれあい喫茶の様子を教えてください。

★松井さん コロナ禍前は、毎月1回開催していました。参加費100円でコーヒーとお菓子の提供をするだけでなく、キャベツ焼きやお菓子を作ったりすることもありました。毎回、20〜30人程度が参加されており、男性も参加していました。

コロナが流行り出した令和2年からの3年間は活動を休止し、令和5年4月から活動を再開しました。

再開に向けた動きを教えてください。

★松井さん コロナ禍で百歳体操に参加している地域の方の様子や話を聞いてみると、ふれあい喫茶のようにみんなで集まって話ができるような場を求めていることが分かりました。ふれ

あい喫茶の再開に向けて、地域住民や専門職が参加する地域ケアネットワーク連絡会で話し合いを重ねました。話し合いの中で、せっかくなら住民の特技を活かせる機会になればと考え、住民が講師となる催しを企画することになりました。

区社協としてはどのような関わりをしていましたか。

◆松原さん もともと、地域福祉活動の参加者と話したり、第2層協議体（いくつになっても元気で暮らしていくためにぎくばらんに話す会）に参加するなかで、高齢者の方々が特技や趣味を披露する場がなく、続けるモチベーションが低下していると話を聞いていたこともあり、何か取組みができないかと考えていました。

松井さんに考えを伝えたところ、ちようどふれあい喫茶の再開に向けて話し合いをしていたタイミングと重なり、ふれあい喫茶で特技を活かせる機会を作れたらどうかと前向きに話が進みました。百歳体操に参加されている方など、松井さんが地域

の方に声をかけ、4月はお菓子作りが得意な方が講師となり、いちご大福作りをおこないました。

今後の展望を教えてください。

★松井さん 再開にあたり、いろいろ不安や戸惑いもありましたが、何より地域の皆さんがお茶を飲みながら集える居場所を再開できたことが喜びです。喫茶だけの参加も大歓迎です。

この3年間でデイサービスに行かれる方も増え、参加できない人もいて残念ですが、毎回、地域の皆さんの力を借りて実施できています。

9月はおはぎづくり、10月は絵手紙づくりなど、今後も地域の方々の特技を活かしながらさまざまなテーマを考えていきます。

区社協職員としてこれまで関わってきたメッセージをお願いします。

◆松原さん 講師も参加者もお互いが笑顔になれる場になっており、良かったと思います。

ただ、3年間休止していたこともあり、参加者が少なくなっています。地域の憩いの家でふれあい喫茶をしていることを知っていただき、外に出るきっかけの一つにしてほしいと考えています。

参加者にとっては初めてのことをやってみることで新たな生きがいづくりにつながると思います。講師の方は特技を活かすことでやりがいにつながり、地域に素敵な方がいることを新たに知る機会になることも考えています。

現在、夫婦で参加されている方もいますが、男性の参加者が減っているの、男性も楽しめる企画を検討していきたいと考えています。

このような場があることが、元気に暮らしていくことにつながっていきます。元気に過ごし続けることができるように、地域に合わせた取組みと一緒に考えていきたいと思っています。



▲6月はアクリルたわしづくり。気づいたら2時間たっていました

集合形式に戻し活動するきっかけの 思いや工夫

2年ぶりのグループ
ワークで横のつながりの
大切さを再確認

大阪市ボランティア・市民活動センターでは、令和5年6月16日、「地域こども支援団体連絡会」を開催しました。

している方の背中を押せるようにとの思いで2団体から報告がありました。コロナ禍を経てから改めて再認識した集合形式で実施する良さや活動者の思い、再開に向けた工夫点など、報告内容を誌面を通じて紹介します。

「地域こども支援団体連絡会」は、市内のこども食堂や学習支援活動など、こどもの居場所づくりに取り組む団体と、それを応援する区社協、企業、こどもの居場所活動に関心のある方などが集まり、協働・連携を図るもので、偶数月に開催しています。



▲グループ形式で開催された「地域こども支援団体連絡会」

報告①

つながりの場smile～すまいる～

〈報告者〉
代表 富田 恵子さん

生野区

地域へ恩返し
したいをカタチに

「つながりの場 smile すまいる」は生野区でこども食堂やパントリー（食料や飲料等の支援物品の配布）＆リユース会、長期休暇の居場所などの取組みをしています。

富田恵子さんは地域でいろいろな方から助けてもらった経験から、地域に恩返しをしたいという思いを持っていました。また、コロナ禍の影響で、不登校や引きこもりが増えているのではないかと感じていました。学校の先生だけでは対応できないこと、オンラインでの授業や時差登校などから友達と会えず、学校でのつながりの希薄化を感じたこともあり、「子どもと大人の孤立を防ぎたい！」



▲声をかけあう関係づくりへとつなげたいと話す「つながりの場smile～すまいる～」代表の富田恵子さん

つながりの場・交流の
場を中心とした活動に
したい強い想いから

コロナ禍で立ち上げたため、初めは感染症対策を講じたうえでテイクアウトのみで開始しました。しかし、当初から考えて

「今だからこそ、関係づくりにつながる活動をしたい」と思い、昨年から活動を始めました。場所探しや飲食店経験もなかったため、食材をどうしたらいいのかなど悩みもありましたが、地域の協力があって、活動を始めることができました。

こども食堂を通して、地域での交流の場・居場所をつくり、孤立減少を目指しています。

顔を合わせることで声を
かけあえるきっかけに

今後は、地域の方にも関わってもらえることができるよう、同年代のお母さんに手伝ってもらえないか声をかけています。スタンプとして入ってもらい、活動を通して参加している子どもたちと顔の見える関係をつくってもらえることで、道で会った際に声をかけあえる関係を広げていくことを大切にしています。

いた交流できる場になるようメンバー同士で話し合い、黙食などのルールを考え、感染症対策を徹底し、昨年6月からは店内飲食を開始しました。コロナ禍で、休止した月もありましたが、集まることで孤立を防ぐことにつながると考え、活動を続けてきました。

また、参加しているこどもから「活動日をすごく楽しみにしている」「家では話せない話もここでなら話せる」などと言ってもらえることがあり、こどもたちにとって第三の居場所になっていると感じ、コロナに負けずに、活動を継続できています。

子ども食堂



富田さんは、「こども食堂はまだまだ認知されていないと思うので、保護者にもこどもにとっても必要な場所だと啓発していきたいです。これからいろいろな方とつながる居場所にしていき、みんな楽しく、多くの人と交流していきたいです」と話しました。



▲感染症対策をし、店内での飲食を再開

報告②

特定非営利活動法人スイスイ・すていしょん／

（報告者）丸山 敏夫さん

淀川区

こども食堂を通じていろいろな家庭とつながりたい



▲「集合形式に戻しても配食の良さを活かすことが大切」と丸山敏夫さん

「特定非営利活動法人スイスイ・すていしょん」は淀川区でこども食堂や学習会、フィールドワーク、田植え・稲刈り、ミカン狩り・いちご狩りなどの交流会、地域行事への参加などを行っています。

「人と人が出会い、つながりあい、子どもから高齢者まで、さまざまな世代が世界にはばたいていく『駅』、だれもが安心してありのままの自分でいられる『居場所』、地域発の人權文化を社会に広げていく『発信基地』としての『ステーション』でありたい」との思いで活動を開始しました。

コロナ禍で気づいた交流することの大切さ

コロナ禍前は住宅の集会所を利用して、「来る子は拒まない」を基本にごはんを提供していましたが、コロナ禍ではテイクアウトに変更して活動していました。

形を変えて実施してきたなかで、集会所ではなかなか来ることが難しい兄弟姉妹等、家族の分までお渡しできる良さはありましたが、「渡すだけで終了ではなく、やはり交流が大切ではないか」「地域の人が地域のこともと関わる良い機会ともなっている」「こどもたちと一緒に食べて交流することに意味がある」と話し合い、顔を合わせて、少しでも同じ空間で交流することの大切さを再確認し、感染症対策をとりながら集合形式へ戻しました。今では早くから待っていることもや「次はハンバーグが食べたい」「ご飯美味しかったよ」とうれしい声が聞けることが励みになっています。

▲交流が大切ではないかと話し合い、集合形式へ



丸山敏夫さんは「月1回の開催で、こどもたちの居場所となっている一方で、保護者の方との関係づくりが課題。こどもと地域住民のつながりだけでなく、親子一緒に交流する機会を増やしていきたいです。地域住民と触れ合う機会を作ること、地域が一体となつてこどもを育てていくんだという思いを共有し、地域の輪を広げていきたいです。そのほか、企業とも連携し、こどもたちがたくさん経験できる機会もつくっていききたいと考えています」と語りました。

今後の展開

報告後、2年ぶりにグループワークもおこない、コロナ禍の活動で苦労したことや発見できた工夫などを共有しました。普段関わるのが少ない団体が一堂に会して話し合うことができ、連絡会終了後も、引き続き今後の活動に向けた情報交換がおこなわれました。

活動を継続していくうえで、まだまだ迷うことが多い状況ですが、今後、活動を考えるにあたって、活動者間での話し合い、活動者同士、関係機関とつながりながら地域のニーズに合わせて活動を考えることが大切です。

連絡会でできた横のつながりを活かし、工夫点を共有することとは、それぞれの活動の活性化へつながります。

また、2団体からの報告にもあったように、集合型に戻していくことの良さだけでなく、テイクアウトなどの形を変えて実施する良さなども考慮し、これからの活動について検討していただき、本誌内容等も活用していただければと思います。

大阪市社協としても引き続き、活動の継続・再開を考える際の参考となるような市内の地域福祉活動の工夫などの情報を発信していきます。

特集

災害時でも地域との連携が できる社協を目指して



各地で台風や集中豪雨、地震などによる自然災害が毎年のように発生しています。また今後も南海トラフ地震や首都直下型地震など大規模震災が想定されています。大規模な自然災害が発生した際には被災地の社協が「災害ボランティアセンター」を立ち上げ、さまざまな支援活動をおこないます。

そこで、今回は災害時における社協の機能や災害ボランティアセンター、災害に備えた取組みについて紹介します。

災害ボランティアセンターってどのようなことをするの？

ボランティア受入から コーディネートの流れ

災害ボランティアセンターでのボランティア受付～活動終了までの一般的な流れ

1 ボランティア受付

2 グループ作り・活動調整

3 オリエンテーション

▼ 活動上の注意等の確認

4 活動資材・物資提供

現地活動

〈例〉

- 泥だしやガレキ撤去などの清掃支援
- 避難所での炊き出し
- 被災者の話し相手、足湯
- 救援物資の仕分け・配送

5 活動終了後、資機材返却

6 活動報告・振り返り

活動終了

※以上は一般的な流れとなりますので、現地によっては異なることもあります。

地震や台風などの大規模な自然災害が発生すると、大阪市社協は大阪市との協議により「災害ボランティアセンター」を立ち上げます。被災者・被災地を主体としながら、ボランティアの協力を得て、地域の復興につなげていくことを目的とした、災害時に設置されるセンターであり、被災地での災害ボランティア活動を円滑に進めるための拠点です。被災者のニーズ（必要としていることや困りごと）とボランティアをつなぐ機能を担います。

流れとしては図のとおりになります。

社協が災害ボランティアセンターを開設する意義

- すべての市町村に存在し、地域の特性を知っている
- 日常的に地域住民の困りごとに対応している
- ボランティアや企業・NPO、行政等との関係を構築している
- 平時には、ボランティア・市民活動センターとしての機能を持ち、被災者に中長期的に寄り添うことができる
- 地域住民の生活課題（困りごと）を把握し、ボランティアや支援者等とともに解決することは、社協の使命である

市社協職員有志で 災害ボランティア 活動に参加しました

令和5年6月2日の梅雨前線及び台風2号に伴い、日本各地で被害があり、いくつかの市区町村社協で災害ボランティアセンターが設置されました。和歌山県海南市では、大雨により市内を流れる日方川と貴志川、加茂川と亀の川の4つの河川が氾濫し、1200棟を超える住宅が浸水被害にあり、6月3日から災害ボランティアセンターが設置されています。

大阪市社協としても何かできればと、6月17日（土）に職員有志4人で海南市のボランティア活動に参加しました。当日は100人ほどのボランティアが集まり、ニーズに合わせて住宅の床下や庭の泥のかきだしをおこないました。



▲床下や庭の泥のかきだし

住民の方からは、「6月2日は仕事から帰ってきたら、床上まで土砂が流れ込んでいた。平日は仕事もあるため、休日に少しずつ片づけをしているが何から手を付けたらいいのかわからず途方に暮れていた」。こうやって来てもらえて本当にありがたい」という言葉をいただきました。社協職員として、被災された方の気持ちに寄りそいながら、困りごとや不安なことを聞きとり、一緒に考えることが大切であり、日頃から意識しておくべきだと感じました。

なお現地では、県内の社協が応援に入り、ライオンズクラブ等の団体が支援にいられていました。市社協でもいつ、どこで起こるか分からない災害に対し、平時から支援のネットワークをつくっていくことを改めて意識しながら他団体等との連携に取り組んでいきます。



▲一緒に活動したメンバー

区社協の取組み

西成区



西成区社協では、全部署から選出した委員による災害対策委員会を毎月実施しています。昨年度は令和5年2月に初めての災害ボランティアセンター設置訓練を開催しました。

また、訓練実施にむけて

- ①OfficeSONOZAKIの園崎氏を講師に招き、災害時の社協の役割をテーマとした研修を全職員必須で実施
- ②社協による災害時の取組みをテーマとした地区社協役員研修の開催
- ③紙媒体とICTツールでの運営比較検討をおこなってきました。

各研修等は区内の社会福祉施設、団体にも呼びかけ、参加を得て実施しました。

北区



北区社協では、令和元年度から毎年災害ボランティアセンター運営者養成講座を開催し（令和2年度は中止）、過去4期で事前登録者44人の運営支援者を育成しています。登録後もモチベーションの低下を防ぐため、「スキルアップ講座」を開催し、活動の充実とチームワークの育成を意識した内容で実施しています。

また、毎年区役所と区社協は、合同防災訓練も実施し、区社協は、災害ボランティアセンターのシミュレーションを担当しています。事前登録者も合同訓練に参画し、学びを深め、より一層の緊張感をもって区社協職員と共に「いざ災害時」に備えています。

地域の役員・企業の方等の事前登録者は、地元地域等での訓練時に内容を伝達されることも多く、北区の防災力アップにもつながっています。

風をよむ

わが国の若年層の 自殺に関する傾向

大阪公立大学大学院生活科学研究科 教授 岡田進一

日本における若年層（20歳代・30歳代）の死因の第1位は、自殺である。厚生労働省の集計によると、若年層の自殺は、2000年代に入り、増加傾向にあったが、2009年以降、減少傾向にあるとされている。なぜ、2009年を起点として減少傾向に転じたのかについては、慎重に分析を行う必要がある。

げられているカテゴリーに入らない内容」が第1位で、次いで「勤務に関する問題」、「経済・生活問題」の順であった。30歳代の自殺の原因・動機では「健康問題」が第1位で、次いで「経済・生活問題」、「勤務に関する問題」の順であった。

2009年における20歳代の自殺者は、年間、約3500人で、30歳代が、年間、約4800人であったが、2018年には、20歳代が約2100人、30歳代が約2600人にまで減少している。しかし、この数年間のコロナ禍での若年層の自殺傾向については、最終集計がなされておらず、今後の集計結果が待たれる。

警察庁によると、20歳代の自殺の原因・動機では、「不明」あるいは「その他」（自殺の原因・動機としてあ

20歳代・30歳代で仕事に就いている者に限れば、20歳代の男性の自殺の原因・動機の第1位が「仕事疲れ」「うつ病」（同じ比率）であったが、女性の場合には、「うつ病」が第1位であった。30歳代では、男女とも、「うつ病」が自殺の原因・動機の第1位となっていた。

これらのことから、若年層の自殺に対する対策では、職場環境の整備と職場におけるメンタルヘルスへの対応システムの構築が重要であり、さらに、若年層の働き方に関する適切な制度設計がなされることが、早急に求められる。

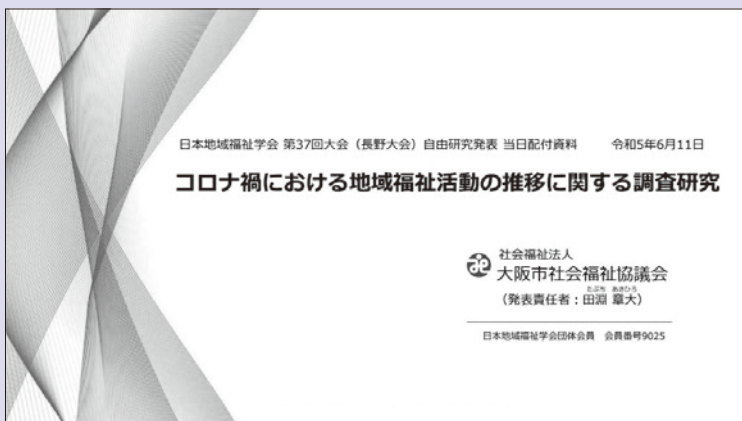
市社協

日本地域福祉学会でコロナ禍での調査結果を報告

令和5年6月11日に開催された日本地域福祉学会第37回大会(長野大会)の自由研究発表(分科会形式)で、大阪市社協が団体会員として発表しました。

内容は、市社協が各区社協の協力を得て、令和3年10月から令和5年2月の約1年半に渡って実施した「コロナ禍における地域福祉活動状況調査」から見えてきたことや、社協としての実践経過をまとめたものです。

当日配付資料は市社協ホームページでも公開しています。トップページの「お知らせ」もしくは二次元コードからアクセスできます。



[演題] コロナ禍における地域福祉活動の推移に関する調査研究

[発表者] 社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会

(発表責任者: 地域福祉課係長 田淵章大)

<https://www.osaka-sishakyo.jp/20230611/>



赤い羽根賞(最優秀賞:採用作品)



※バッジの直径は
17mm程度

なかもとせいじ
【作者】永本成児さん(大阪府・グラフィックデザイナー)
【制作意図】令和5年の干支、うさぎをモチーフにしました。
やさしい心で善意の輪が広がります。

愛ちゃん賞(優秀賞)・希望くん賞(奨励賞)

受賞者・受賞作品については、大阪府共同募金会のホームページに掲載いたします。

●ホームページ【赤い羽根おおさか】

<http://www.akaihane-osaka.or.jp>

10月1日から全国で実施する第77回赤い羽根共同募金運動で使用される記念バッジのデザインが決定しました。近畿6府県(滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県)共同募金会が合同で募集。232点の応募作品の中から、選考委員会の審査の結果、赤い羽根賞(最優秀賞・採用作品)1点、

愛ちゃん賞(優秀賞)5点、希望くん賞(奨励賞)20点を決定いたしました。採用されたデザインによって製作した記念バッジは、今年度の共同募金運動期間中に、共同募金に協力いただいた方へのお礼や、共同募金をPRするためなどに、近畿6府県を中心に広く活用されます。

令和5年度赤い羽根共同募金記念バッジデザインは「やさしい心で善意の輪が広がりますように」に決定

お問合せ先

社会福祉法人大阪府共同募金会 担当: 熊谷、内藤
〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54
大阪社会福祉指導センター2階
☎ 06-6762-8717 ☎ 06-6762-8718
✉ ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp
🌐 <http://www.akaihane-osaka.or.jp/>

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

自動車保険 火災保険 地震保険

www.ms-ins.com